

ヒト母親の行動抑制と幼児顔表情による阻害効果の 検討

林, 小百合

<https://hdl.handle.net/2324/4060242>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (感性学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名	林 小百合 (はやし さゆり)			
論 文 名	ヒト母親の行動抑制と幼児顔表情による阻害効果の検討			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	樋口 重和
	副 査	九州大学	教授	綿貫 茂喜
	副 査	首都大学東京	教授	菊池 吉晃

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、ヒト母親の養育行動に関連する特徴を科学的に明らかにすることを目的とした研究である。具体的には、子ども虐待リスクとの関連が示唆される母親の衝動性を、行動の抑制機能を調べる課題 (Go/Nogo 課題) のパフォーマンスによって測定し、それが幼児顔表情の提示によってどの程度阻害されるかについて調べていた。また、行動の抑制反応に伴って生じる脳波の事象関連電位も同時に測定していた。さらに、これらの母親の特徴が養育行動に関わるとされている血清のオキシトシン濃度やプロラクチン濃度と関連があるかどうかについても検討していた。

第 2 章ではオキシトシンとプロラクチンの血清濃度と、行動抑制や子どもの顔表情による阻害効果の関連を検討していた。最初の実験は、母親でない女性を対象に、オキシトシンやプロラクチンの濃度が異なる 2 点 (月経周期の卵胞期と黄体期) で計測を行っていた。その結果、オキシトシン濃度の高さは、子どもの顔表情とは関係なく、行動成績 (感度 d') の良さに関連があった。プロラクチンに関しては、特に子どもの怒り顔が阻害刺激であったとき、プロラクチン濃度が高いほど Nogo-N2 潜時が長いことが示された。

第 3 章では、母親と母親でない女性の比較を行っていた。その結果、母親群は非母親群と比較して衝動性が高かった。さらに、特に母親群においてオキシトシン濃度の高さと衝動性の高さに関連があり、ヒト母親の衝動性とオキシトシンの関連を示唆する結果であった。また、興味深いことに母親群は行動抑制課題の感度 d' も高く、それがオキシトシン分泌量と関連していた。

第 4 章では、育児ストレスの高さとの関連を検討していた。その結果、育児ストレスの高い母親では行動成績の感度 d' が低かった。高い育児ストレスを受けている母親は、慢性的にストレスを受け続けることによる影響などから、衝動的な行動が抑制できにくい状態にある可能性を示唆する結果であった。

以上の通り、本研究成果は、感性科学的な方法を用いてヒト母親の育児にかかわる行動特性を明らかにした研究として、価値ある業績と認められる。

最終試験

この論文について、論文調査委員会は、令和 2 年 2 月 17 日 (月) 14 時 30 分から九州大学大橋キャンパス 5 2 4 教室において、林小百合氏及び論文調査委員全員の出席により、公開による論文の調査及び最終試験を実施した。

論文内容について、林小百合氏は論文調査委員（全員）の質問に的確にかつ明確な回答を行い、また、口頭又は筆答により行われた関連の授業科目等に関する調査についても、論文調査委員を満足させる回答を行ったことから、論文調査委員会は最終試験を合格と認定した。

以上のことから、論文調査委員会は、林小百合氏が博士（感性学）の学位を授与されるのに相応しいと判断した。